

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：35507

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13871

研究課題名(和文) 若者就労支援における「障害」の位置価に関する研究

研究課題名(英文) A Study about the Positional Value of "Disorder" in a Youth Support Organization

研究代表者

御旅屋 達(Otaya, Satoshi)

山口学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：10646558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：若年労働市場の問題化に伴い、無業の若者を対象とした自立支援の仕組みが制度化されてきた。この過程において、若者支援現場に困難度の高い若者たちが想定以上に存在するという事実である。本研究は、本来「障害」を支援対象としない若者就労支援施設における、障害のグレーゾーンにある当事者の支援が成立する諸条件について明らかにし、その支援過程において「障害」言説がどのように理解され、流通しているかについて検討をおこなうものである。調査を通じて、若者支援現場において作られる若者同士の関係において障害の理解が促進されることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若者支援における「障害」の位置価の解明、という研究設問の新奇性が挙げられる。また、本研究は当事者に障害名を付与するという営みを就労支援実践の論理と当事者のニーズから検討するという試みでもあり、ラベリング論や医療化論の議論にも知見を提供できる。加えて、就労からも福祉からも遠い、発達障害のグレーゾーンという現代的な困難に対する就労支援モデルの提示という政策的・実践的意義も期待できる。

研究成果の概要(英文)：As the young labor market has become more problematic, support mechanisms for young people have been institutionalized. In the process of institutionalization, it has become clear that there are many young people suspected of having disorders in the field of youth support. The purpose of this study was to clarify how support for young people with suspected disorders is provided in youth support facilities that are not primarily targeted at "disorder". Therefore, this paper examines how the word "disorder" is understood and distributed in the support field. As the result, it was clarified that the relation between the youth influenced the understanding of the disability.

研究分野：福祉社会学

キーワード：発達障害 居場所 自立支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、若年労働市場の問題化に伴い、無業の若者を対象とした自立支援の仕組みが制度化されてきた。この過程において明らかになってきたことのひとつが、若者支援現場に困難度の高い若者たちとりわけ発達障害や精神障害の可能性のある者が想定以上に存在するという事実である。特に、発達障害を抱えた者の直面する困難は、対人関係において表れることが多く、その困難の特性からひきこもりなどにつながるケースが少なくない。たとえば障害者職業総合センターの2013年の調査では、地域若者サポートステーションの利用者のうち64.3%にコミュニケーションや対人態度、精神的不安定の問題が確認され、障害のグレーゾーンに位置する若者が支援施設に集まっていることが指摘されている。特に地域若者サポートステーションは、その個別性・包括性の高さによって、他の支援機関が受け入れにくい若者の受け皿となってきた。

こうした状況下で若者就労支援施設が行えることの一つに、当事者の「障害受容」を促し、適切な支援機関や制度に繋げることがある。であるとすれば、支援者・当事者はいかなる資源・方法によって「障害」に対応し、就労や福祉的支援といった次のステップへと接続していくか、その「障害」はいかなるものとして捉えられているか、という支援の内実を明らかにする検討がなされなくてはならない。加えて、こうした実践を、障害を対象としない支援が担うことのコストやリスクについても検討される必要がある。

しかしながら、若者就労支援現場において本来対象外であるはずの「障害」が、若者支援現場においてどのような地位にあり、いかなる支援実践が行われているかという内実を解明しようという作業については、現職の支援者によるいくつかの報告があるものの、体系的な調査はこれまで行われてこなかった。

こうした関心から本研究では次の目的を掲げることとした。

2. 研究の目的

本研究は、本来「障害」を支援対象としない若者就労支援施設における、障害のグレーゾーンにある当事者の支援が成立する諸条件について明らかにし、その支援過程において「障害」言説がどのように理解され、流通しているか、そして若者支援において医療的概念を採用することの意味について検討をおこなうものである。また、この作業を通じ、成人発達障害者支援政策及び若者支援政策の制度設計の課題を抽出し、政策提言を行うこと、若者支援現場における障害者支援に関する実践知を言語化し、実践にフィードバックしていくことも目指す。

3. 研究の方法

本研究では、若者就労支援において発達障害のグレーゾーンにいる当事者への支援実践の成立要件について実践の内外から検討すること、そしてその支援過程において「障害」言説がどのように理解、流通されているかについての検討を行う。支援実践場面におけるミクロな相互行為の観察、インタビューを中心に、若者支援と発達障害者福祉制度の間の制度的・社会的関係の視角も組み込みながら、若者支援施設における障害者支援の成立条件と困難について検討していく。

対象としたのは、首都圏のNPO法人Xによって運営される地域若者サポートステーション事業、とりわけ事業の一環として設置する「居場所」、あるいは「フリースペース」と呼ばれる、当事者に対して自由に利用できる空間を提供する支援実践（以下、「居場所」提供型支援）である。利用者、スタッフへの聞き取り調査を中心に、観察調査、インフォーマルな聞き取りを併用した。

「居場所」提供型支援に注目する理由は、「居場所」提供型支援においては個人の置かれた状態を承認することがその実践の基盤になっていること、そして若者支援の中でも比較的困難度の高い若者に多く利用されている形態であることである。長期にわたるひきこもり期間を有しているなど、強い困難を抱えている若者は、就労以前に対人関係の構築や公共空間に足を運ぶことそのものに困難を抱えていることが少なくない。こうした若者にとって、職能開発や雇用の斡旋といった従来想定されてきた就労支援は個人の特性と社会環境との不整合を修正し、社会適応を促す支援はミスマッチとなりやすい。考えうるもう一つの方向性は、個人の特性を承認し、エンパワメントする道筋である。こうして困難度の高い若者を対象として特に2000年代以降、「居場所」や「フリースペース」と呼ばれる空間が、官民によって設置されてきた。こうした「居場所」提供型支援の特性は、包括性の高さや就労を同時に志向しようとするサポステにおける「障害」への意味付けの変容プロセスを解明しようとする本研究の関心へのアプローチに適合的である。

4. 研究成果

Xにおける調査から得られる知見は大きく2点に整理できる。第一に、「障害」を疑われる者の存在が、「居場所」提供型支援の利用者に混在性をもたらしていることである。Xの利用者は「ひきこもり」という状態にあるという共通性を持つが、実際のところ、支援に集まってくる若者の状態は社会参加の度合いも、ひきこもっていた期間も様々であり、一様に捉えることはできない。「障害」を有しているかもしれないという利用者がXに「いられる」ことは、他の利用者にとっては、場の成員の多様性の高さとして理解され、肯定的に受け止められている。集団の混

在性の高さは集団の同調圧力を軽減し、コミュニケーションに困難を抱えた若者の集団参加に対する障壁を押し下げるように働く。また、スタッフの側から見ると、この混在性は、異質な他者である利用者同士のコミュニケーションにおいて葛藤を生じさせ、それを乗り越えることによる相互理解の促進という機能を期待していることが明らかになった。こうした相互理解が可能になるのは、若者支援機関の利用者同士が「無業の若者」という共通性を持っていながら、その背景は多様であるという関係性によるものである。すなわちゴッフマンのいうところの「同類」であり、同時に「事情通」でもあるという二重の関係性にあることによる。

第二には、若者支援機関における「障害」に対する若者の意味付与の条件やプロセスを明らかにしたことである。ひきこもり経験のある若者が、「普通」の生活に強くこだわりを持つことは、先行研究においてたびたび指摘されてきたが、自身の「障害」に気づきつつある若者は、支援者に対して自身の「正常でなさ」の承認を要求する。こうした要求は、若者が自身の状況を「障害」として意味づけていく相互行為の初期段階と理解することができる。同時に、支援者の立場からもそうした「正常でなさ」を承認しつつ、若者本人に失敗の経験が蓄積されるまで「障害」概念を提示しないなどの配慮が行われている。また、若者が自身の困難を「障害」として位置づけたり、障害者としての就労を決意したりする契機として、「居場所」において形成された利用者同士の関係性、利用者間での「障害」についての情報交換や、「障害受容」への肯定的な意識変容が機能することを指摘した。また、広く「若者」を対象としている若者支援機関、特にサポステにおいては、自身の困難をいかなる概念に紐付けるかについて、若者による自己規定の可能性が開かれていることも指摘した。

こうした知見から得られる示唆について、2点あげることができるだろう。第一には医療化論に関係論的な視角からの検討可能性を拡張したことをあげられる。若者が自身の「障害」を認識する際には、これまで障害認識の関係論的検討の中で言及されてこなかった、「障害者（あるいはそれを疑われる者）同士が互いの身体状況を見ている視線」の重要であることが明らかになってきた。若者の困難と医療的な概念との接続は、必ずしも支援者や医療従事者によって一方向的に行われるものではなく、若者同士の関係性や、若者のキャリア形成の中で必要に応じて行われるという側面がある。こうした知見からは、医療的概念もまた、社会的な文脈において理解・適用されており、個人の「障害」は医療的観点から理解されるべきか、あるいは社会的文脈から理解されるべきかという二項対立的な図式が成り立たないことを示すことができる。より実践的な示唆として、若者支援機関における「障害」への意味付与には「就労」への志向が強く影響していることを示したことをあげられる。Xにおいては、利用者はみな「ひきこもり」あるいは「若年無業」という状態にある、その状態から望ましい状態、就労している状態へ移行したいという志向が「障害」の認識に強い影響を与えていること、すなわち、若者支援機関において「障害」は、若年無業やひきこもりといった状態からの回復という目的の下部に置かれていることがわかってきた。利用者にとっても支援者にとっても、医療的診断の受容や福祉サービスは、「就労」という目的に向けて道具的に活用されうる。「障害者」とは「継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」（障害者基本法）であり、個人の特性が生活上の支障とならない限り、それは「障害」にはなりえない。若者支援の場が就労を支援する場である限り、そこで「障害」が問題になるか否かは、それが一般就労への移行においてどれほど制限となっているかによる。若者の就労支援における「障害」には「一般就労に対する障害」と理解される側面があるといえよう。

以上のように、若者支援において「障害」という医療的概念は社会的文脈に応じて、若者個人の志向や置かれた状態に応じて、多層的に読み替えられる。そのため、スティグマ化のリスクをはらむ医療的概念も、時に別様のスティグマからの解放のために意図的に、あるいは協同的に運用されうる。これらの事例が示すのは、「障害」という概念から想起されるリスクや個性性は、十分に問い直し可能であるということである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 御旅屋達・立田瑞穂	4. 巻 10
2. 論文標題 教育現場体験における大学生の立場制の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口学芸研究	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 御旅屋達	4. 巻 101
2. 論文標題 若者支援における「障害」の位置価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 131-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Satoshi OTAYA
2. 発表標題 Medicalization and Youth Support
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 阿比留久美・岡部茜・御旅屋達・原未来・南出吉祥	4. 発行年 2020年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 「若者/支援」を読み解くブックガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----